

広島市における感染症発生動向調査結果について（2004 年）

生 活 科 学 部

は じ め に

平成 11 年 4 月、「感染症の予防及び感染症の患者に対する医療に関する法律」が施行され、感染症発生動向調査事業が全国的規模で実施されている。広島市では、平成 13 年 4 月から衛生研究所に感染症情報センターを設置し、感染症情報の解析、提供を行っており、今回、2004 年の広島市における感染症患者発生状況をまとめたので報告する。

方 法

1 対象疾患

対象疾患は、国の実施要綱に示されている一類感染症（エボラ出血熱等 7 疾患）、二類感染症（急性灰白髄炎等 6 疾患）、三類感染症（腸管出血性大腸菌感染症 1 疾患）、四類感染症（E 型肝炎等 30 疾患）、全数把握対象の五類感染症（アメーバ赤痢等 14 疾患）及び定点把握対象の五類感染症（インフルエンザ等 28 疾患）の合わせて 86 疾患とした。

2 患者情報の収集

全数把握対象の感染症については市内医療機関から、定点把握対象の五類感染症については定点医療機関から週単位又は月単位で、各行政区に置かれている保健センターに届出又は報告される。各保健センターでは、感染症発生動向調査システムにより患者情報の入力処理と感染症情報センターへの報告処理が行われ、感染症情報センターでは全市分の集計処理を行った。全国情報は、中央感染症情報センター（国立感染症研究所）から還元されるデータを用いた。

3 定点医療機関

定点把握対象の五類感染症については、定点医療機関（患者定点）から疾患区分により週単位又は月単位で報告される患者発生情報を収集した。市内に置かれた患者定点の内訳は、インフルエンザ定点（小児科定点を含む）37、小児科定点 24、眼科定点 8、性感染症定点 9、基幹定点 7 である。

4 調査期間

平成 15 年 12 月 29 日～平成 17 年 1 月 2 日（2004 年第 1 週～第 53 週）。

結 果

1 全数把握対象疾患

医療機関から届出のあった疾患は、二類感染症はコレラ、細菌性赤痢、腸チフスの 3 疾患、三類感染症は腸管出血性大腸菌感染症、四類感染症は A 型肝炎、つつが虫病、デング熱、レジオネラ症の 4 疾患、五類感染症はアメーバ赤痢、ウイルス性肝炎、急性脳炎、クロイツフェルト・ヤコブ病、後天性免疫不全症候群、梅毒の 6 疾患で、合わせて 14 疾患であった。一類感染症については届出がなかった。2004 年における各疾患の届出数を表 1 に示した。比較的届出数の多かった疾患は次のとおりである。

(1) 腸管出血性大腸菌感染症

47 人の届出があり、2003 年の 24 人から大きく増加したが、すべて散発事例であった。月別では、8 月が 19 人と最も多く、次いで 5 月の 12 人が多かった。血清型別では、O-157 が 33 人（70.2%）、O-26 が 14 人（29.8%）であった。年齢別では、年齢が低くなるほど届出数が多くなる傾向にあり、9 歳以下が 24 人と約半数を占めていた。

(2) 後天性免疫不全症候群

20 人の届出があり、2003 年の 5 人から大きく増加した。このうち 12 人が無症候性キャリア、5 人がエイズであった。性別では、20 人すべて男性であった。年齢別では、30 歳代が 11 人と多かった。

表 1 全数把握対象疾患の届出数（2004 年）

類型	疾 患 名	届出数
二類	コレラ	3
	細菌性赤痢	8
	腸チフス	1
三類	腸管出血性大腸菌感染症	47
四類	A 型肝炎	1
	つつが虫病	6
	デング熱	1
	レジオネラ症	2
五類	アメーバ赤痢	8
	ウイルス性肝炎	7
	急性脳炎	2
	クロイツフェルト・ヤコブ病	2
	後天性免疫不全症候群	20
	梅毒	7

感染経路は、性行為によるものが19人でほとんどを占めており、同性間が14人、異性間が5人であった。

(3) アメーバ赤痢

8人の届出があった。感染経路は、経口感染が3人、性行為によるものが1人であった。

(4) ウイルス性肝炎

7人の届出があった。病原体別の内訳は、B型が5人、C型が2人であった。

(5) 梅毒

7人の届出があった。内訳は、無症候1人、早期顕症(Ⅰ期)2人、早期顕症(Ⅱ期)1人、晩期顕症3人で、性別では男性6人、女性1人であった。

(6) つつが虫病

6人の届出があった。月別では、11月が3人、12月が2人、1月が1人であった。

2 定点把握対象五類感染症

(1) 週単位報告疾患

インフルエンザ定点、小児科定点、眼科定点及び基幹定点から毎週報告される21疾患の報告数を表2に示した。年間の定点当り累積報告数を見ると、感染性胃腸炎の464人が最も多く、続いてインフルエンザ169人、水痘86.5人、A群溶血性レンサ球菌咽頭炎62.8人、ヘルパンギーナ43.9人、突発性発しん43.4人、流行性角結膜炎41.5人などとなっている。報告数が比較的多く、年間の推移に特長が認められたインフルエンザ、咽頭結膜熱、感染性胃腸炎及びヘルパンギーナについて検討した。これら5疾患について、広島市と全国における週別の定点当り報告数の推移を図1に示した。

a インフルエンザ

年間の定点当り累積報告数は169人で、前年の153人と比べ前年比1.09とほぼ横ばいであった。2003/2004年シーズンは、2004年第3週に定点当り4.24人となり、例年よりやや遅れて流行期に入った。

流行のピークは2004年第6週(定点当り36.2人)で、以後減少し終息に向かったが、流行末期の第15週から再び増加し、第20週までにかけて、この時期としては多い状態が続いた。

b 咽頭結膜熱

年間の定点当り累積報告数は24.4人で、前年の9.42人と比べ前年比2.58と大きく増加し、2000

年以降では、最も多い報告数であった。年初期から比較的多い状態で推移したが、第29週に定点当り1.67人のピークを記録した後は減少傾向で推移した。

c 感染性胃腸炎

年間の定点当り累積報告数は464人で、前年の425人と比べ前年比1.09とほぼ横ばいであった。年間の累積報告数は、小児科定点患者総数の59.1%を占め、小児科定点報告対象疾患の中で最も多かった。

第2週に増加した後は、しばらく減少傾向で推移していたが、第8週ごろから再び増加傾向となり、第13週にピーク(定点当り19.2人)を迎えた。その後は、再び減少傾向となり、夏季は低い水準であった。第46週ごろからまた増加が始まり、第51週に定点当り17.1人のピークとなった。

d ヘルパンギーナ

年間の定点当り累積報告数は43.9人で、前年の34.0人と比べ前年比1.29とやや増加した。

第24週ごろから増加が始まり、第29週にピーク(定点当り5.71人)を迎えた後は減少に転じた。

(2) 月単位報告疾患

月単位で報告される定点把握五類感染症(性感染症定点から報告される性感染症4疾患及び基幹定点から報告される薬剤耐性菌感染症3疾患)の報告数を表3に示した。

a 性感染症

性感染症4疾患のうち、年間の定点当り累積報告数が最も多かったものは、性器クラミジア感染症の22.1人で、次いで淋菌感染症の15.5人であった。性器ヘルペスウイルス感染症と尖圭コンジローマを加えた性感染症4疾患の総数は、前年比0.82とやや減少した。

b 薬剤耐性菌感染症

年間の定点当り累積報告数は、メチシリン耐性黄色ブドウ球菌感染症が64.1人と最も多く、次いでペニシリン耐性肺炎球菌感染症33.7人、薬剤耐性緑膿菌感染症5.01人の順であった。薬剤耐性菌感染症3疾患の総数は、前年比0.75とやや減少した。

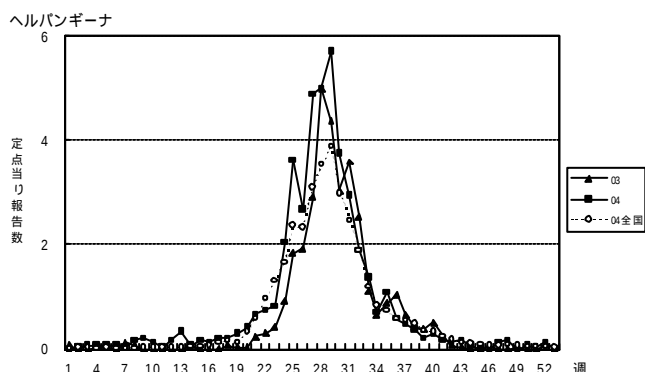
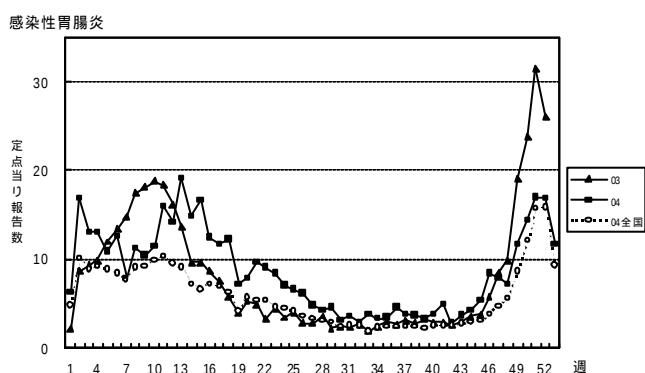
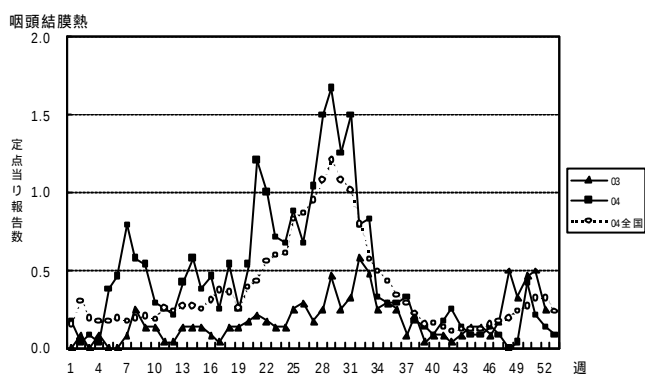
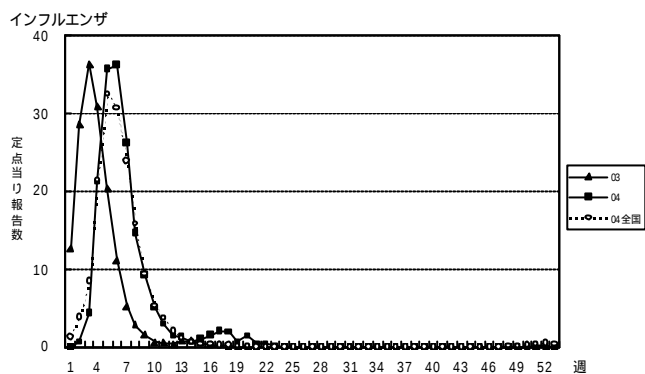


表2 定点把握対象五類感染症患者報告数
(週単位報告分) (2004年)

疾患名	報告数 ()内は定点当り 累積報告数
インフルエンザ	6,238 (169)
咽頭結膜熱	584 (24.4)
A群溶血性レンサ球菌咽頭炎	1,505 (62.8)
感染性胃腸炎	11,129 (464)
水痘	2,073 (86.5)
手足口病	236 (9.92)
伝染性紅斑	427 (17.8)
突発性発しん	1,040 (43.4)
百日咳	59 (2.45)
風しん	11 (0.44)
ヘルパンギーナ	1,052 (43.9)
麻しん	19 (0.77)
流行性耳下腺炎	694 (29.0)
RSウイルス感染症	198 (8.26)
急性出血性結膜炎	9 (1.15)
流行性角結膜炎	331 (41.5)
細菌性髄膜炎	9 (1.26)
無菌性髄膜炎	53 (7.53)
マイコプラズマ肺炎	77 (11.0)
クラミジア肺炎	0 (0.00)
成人麻しん	0 (0.00)

表3 定点把握対象五類感染症患者報告数
(月単位報告分) (2004年)

疾患名	報告数 ()内は定点当り 累積報告数
性器クラミジア感染症	199 (22.1)
性器ヘルペスウイルス感染症	64 (7.12)
尖圭コンジローマ	38 (4.20)
淋菌感染症	139 (15.5)
メチシリン耐性黄色ブドウ球菌 感染症	434 (64.1)
ペニシリン耐性肺炎球菌感染症	228 (33.7)
薬剤耐性緑膿菌感染症	34 (5.01)

図1 定点当り報告数の週別推移